

日本語学習者の自称詞の使用形式と男女差

—留学生を中心とした調査から—

田中 優輝

1. はじめに

「わたし」はフォーマルな形式であり、日本語教育において最初に教えられる自称詞でもあるが、実際の生活場面では親しさなどの意味を伴って他の形式が使われることも多い。本稿では、日本語学習者の初級、中級、上級のそれぞれのレベルにおいて、「わたし」以外の自称詞の形式の使用にどのような差があるのかということを、各レベルの日本語学習者の自称詞の使用実態から明らかにしたい。また、同じレベルでも男女で「わたし」以外の形式を使用するかどうかには差があると考えられるが、どのように差があるのかということも明らかにしたい。これにより、日本語教育でいつ頃からどのようにどんな自称詞の形式を導入していったらよいのかを考えていくことが可能になる。小川(2006:39)では「日本語の話しことばには男女差があるが、それについて日本語学習者を対象とした体系的なシラバスはない。」と指摘している。これは、終助詞に関する指摘であるが、自称詞に関しても同様であろう。

本稿では、留学生の自称詞を調査し考察し、さらにそれらの形式の教科書での扱いも見えていく。なぜなら、留学生の場合はビジネス日本語の場合とは異なり、日本人の友人と話したりするインフォーマルな場面で、普通体で話すことも多いと考えられ、自称詞も「わたし」以外を使うことが多いと考えられるからである。特に「わたし」以外の自称詞を使うときには、社会でその自称詞の使用者がどのように受け取られるかを認識しておく必要がある。

2. 先行研究

先行研究では、小林(1997a:114)で「日本語の人称代名詞は本来、絶対的な人称をあらわすというより、相手に対する自分、自分に対する相手や第三者

の関係を表す待遇的役割を担っている。」と社会的役割について述べている。

自称詞のバリエーションを多数持たない言語を母語とする学習者には、日本語の自称詞の習得は難しいと考えられる。特に自称詞に男女差がない母語話者には、日本語における男女の自称詞の使用差はしっかり教える必要があるだろう。そうでなければ、「わたし」以外の自称詞を使用した時、学習者の人柄が他人に誤解されてしまう危険性があるからだ。男女差の習得の難しさに関して鈴木(2007: 53)は、

日本語の母語話者にとって、女性的な言語形式が女性的に、男性的な言語形式が男性的に感じられるのは当然にみえる。しかし、日本語学習者は教室内で学ぶか接触場面から自然に習得するかしなければ、女性的か男性的かという判断はできない。母語話者には、ある言語形式がどの程度女性的あるいは男性的と感じられるのかについて共通の理解が存在しているが、日本語学習者には存在していないからである。

と母語話者と日本語学習者の認識について述べている。

また、定延(2005: 3)においては、日本語学習者について、

「美しく正しい日本語音声コミュニケーション」というものよりも、「きもちのこもった現実の日本語音声コミュニケーション」に興味を持っている。

としている。この指摘からも文法的な正しさだけではなく、実際の会話においてその語を使った際に相手にどのように受け取られるのかということを学びたいというのは学習者自身の要求であるとも言えるだろう。

バリエーションという観点から述べた杉戸(2007: 23)では、

言語行動のバリエーションには、言語場面などに応じて、それぞれ、コミュニケーションにかかわる様々な「価値・目標」というべきものがつき

まとして(備わって)おり、言語行動主体は、そのつどの言語行動ごとに、その言語行動のバリエーションによって実現したいと考える「価値・目標」を意識し選択していると考えるのが適切だと思われる。

とし、また「日本語学習者に対して、日本語社会の現状の情報、日本人の自己把握の情報、日本語社会の通念・規範意識の情報などを的確に示すことが必要である」(杉戸2007:26)と論じている。このことから日本語教育でバリエーションを扱う必要があるといえる。

日本語母語話者に対して会話を調査し、教科書の自称詞・対称詞の出現数と比較考察を行っている先行研究として大浜他(2001)がある。また、楠本(2011)は中国人日本語学習者に対して自称詞・対称詞の調査を行い、省略という点から、自然さについて述べている。本稿でも日本語学習者の自称詞の使用を観察することを通して、日本語教育での扱い方について考えていく。

3. 調査対象と調査方法

調査対象は関西の4つの大学に来ている留学生と、日本在住で日本の大学に学部生として在籍している日本語を母語としない学習者である。調査の際、男女や母語に偏りがないように配慮した。調査期間は2013年6月から2014年2月までである。調査人数は25人で詳細は以下の表1のとおりである。調査方法はアンケート(資料1を参照)とインタビューである。なお、表1中のインタビュー調査の項目で、○は15分の録音を表し、△の場合は15分の録音を行ったのではなく、数分友達と話す時の話し方で話してもらい、どんな自称詞が出てくるかというのを確認したということである。空欄の場合はインタビュー調査は行っていないことを示す。特に滞在期間が短い学習者にインタビューの未実施が多いのは時間的な問題と話すことが難しいというレベルの問題による。

レベルは基本的に学習に使用した時の教科書のレベルを基準に初級、中級、上級の3つに分けた。教科書を基準に分ける際は、初級が全て終わっている段階なら中級などというようにした。インタビュー調査も行った学習者につ

いては、それも参考にし、レベル分けを行った。

表 1 調査対象者のデータ

調査対象者 ⁽¹⁾	母語	性別	レベル	インタビュー調査	調査時点での滞在期間 ⁽²⁾
C1	中国語	男性	上級	○	1年以上
C2	中国語	男性	中級	○	約3ヶ月
C3	中国語	女性	上級	○	約3ヶ月
C4	中国語	女性	上級	○	約1ヶ月半
C5	中国語	女性	上級	○	約1ヶ月半
C6	中国語	女性	上級	○	約2ヶ月
K1	韓国語	男性	上級		約10日
K2	韓国語	男性	中級	○	約10日
K3	韓国語	男性	初級	○	約3ヶ月
K4	韓国語	男性	初級	△	約10日
K5	韓国語	男性	初級	△	約10日
K6	韓国語	男性	初級		約10日
K7	韓国語	男性	初級		約10日
K8	韓国語	女性	上級	○	1年以上
K9	韓国語	女性	上級	○	1年以上
K10	韓国語	女性	中級		約10日
K11	韓国語	女性	初級		約10日
K12	韓国語	女性	初級		約10日
A1	英語	男性	中級	○	約2ヶ月
A2	英語	男性	中級	○	約3ヶ月
A3	英語	女性	中級	○	約2ヶ月
A4	英語	女性	中級	○	約2ヶ月
E1	英語	男性	中級	○	約2ヶ月
F1	フランス語	男性	上級	○	約2ヶ月半
T1	中国語	男性	中級	○	約1ヶ月半

インタビュー調査は初めて会った学習者の場合は慣れていないため、実際の使用と異なる自称詞が出てくると考えられるので、2回目以降に会った時または、慣れるための時間を数十分とってから調査を行った。インタビュー調査の15分の録音は、最初に友達と話す時の話し方で話すように依頼して、インタビュアーも普通体で質問をした。基本的には最初の5分は慣れるため

の時間と考え、開始後 5 分～15 分までの 10 分間を考察対象とした。ただし、その中に自称詞の使用がないもの (T1) もあったので、そのデータに関してのみ、最初の 5 分も考察対象とした。また、インタビューをしたデータの中で、自称詞の使用がまったくなかったもの (C6) も 1 件ある。そのデータに関してはアンケート結果のみを示す。質問の主な内容は日本に来てから驚いたことや学習者の趣味の話、日本の食べ物について、学習者の出身地についてなどで、できるだけ自称詞を用いて返答できるように質問の内容を工夫した。

なお、本稿では使用回数ではなく種類を調査するため、今回は使用回数については特に問題にしないこととする。

4. 調査結果

以下では、男女差、母語との関連などの項目について、それぞれ結果を示す。

4.1 男女差との関連

表 2 アンケート調査による「わたし」以外の自称詞の使用

性別	人数	「わたし」以外の使用者数	「わたし」以外の使用形式および使用者数
男性	14	9	僕 9、俺 5、わたくし 1、自分 1
女性	11	3	うち 2、あたし 2、名前 1、こっち 1

この結果から男性と女性の調査人数に差はあるが、男性の「わたし」以外の自称詞の使用者数は女性の 3 倍であり、「俺」「僕」などの専用形式を持つ男性の方が「わたし」以外の形式をよく使うと言える。また、今回の調査からは男女ともに使用する「わたし」以外の自称詞は見られなかったが、調査人数を増やすと、出てくる可能性はある。例えば、女性の「わたし」以外の使用する形式に「こっち」があるが、これは男性学習者が使うこともあるかもしれない。

次に、インタビュー調査の結果を表 3 で示す。なお正式なインタビュー調査ができなかったものも含む。

表3 インタビュー調査による「わたし」以外の自称詞の使用

性別	人数	「わたし」の 使用者数	「わたし」以外の 使用者数	「わたし」以外の使用 形式および使用者数
男性	11	6	6	僕 6
女性	8	7	3	うち3、あたし1

表3では男性にはアンケート調査と比べて使用者数に違いが見られるが、女性には違いが見られない。ただし、アンケートで「わたし」以外の形式を使うと答えなかった学習者がインタビューでは使用した場合もあったので、表2、表3の3人は同一人というわけではない。表3で女性8人中7人は「わたし」を使用していること、表2で女性の「わたし」以外の形式を使用すると答えた学習者が少なかったことと合わせて考えると、女性は「わたし」以外の形式を使用する機会があまりないと言える。また、教科書から日本語を学ぶことが多い学習者の場合には、「6.まとめ」でも述べるが、初級教科書に女性が主に使用する形式とされるものがでてこないことも関わりがあると考えられる。小林(1997b: 24)は、日本語母語話者の調査に基づき「彼女たちが自称をいわば一つの武器として、自分のかわいらしさや、遊び心を表現することもできるのには、いざあらたまった場では迷うことなく使うことができる自称「ワタシ」があるからとも言えよう。」と述べている。女性にとっての「わたし」という自称詞のこのような位置づけもこの問題に関係していると考えられる。

使用した形式を見るとアンケートでは使用するという答えがあるのに、インタビューでは現れなかった形式としては男性の「俺」「わたくし」「自分」、女性の「名前」や「こっち」が挙げられる。これらの形式は留学生にとって使いたいという意識はあったとしても、実際に使用する際にはどのような場面で使用したらいいのかという判断が難しい形式だと言えるかもしれない。

「わたし」のみの使用は場合によっては日本の友達と親しくなる際に日本語でのコミュニケーション上の問題となる可能性がある。言い換えれば、「わたし」以外の形式を使用するかどうかがどこまで親しくなるかということと深く関わると考えられる。

4.2 母語との関連

ここでは、母語との関連を示す。なお、表ではアンケートの結果とインタビューの結果をあわせて示す(以下同様)。

表4 学習者の母語と「わたし」以外の自称詞の使用

学習者の母語	人数	「わたし」以外の 使用者数	「わたし」以外の使用 形式および使用者数
中国語母語話者(男性)	3	3	僕3、俺2、自分1、 わたくし1
中国語母語話者(女性)	4	1	うち1
韓国語母語話者(男性)	7	2	僕2、俺2
韓国語母語話者(女性)	5	2	うち2、こっち1、 あたし1
欧米圏(男性)	4	4	僕4、俺1
欧米圏(女性)	2	1	あたし1、名前1

中国語母語話者女性に「わたし」以外の形式の使用が少ないが、中国語母語話者の男性と比較して学習レベルに大きな違いはない。そのため、これは4.1で指摘した、女性が「わたし」以外の形式を使用することが少ないことと関連していると考えられる。韓国語母語話者では、特に男性で全体数に対して「わたし」以外の形式を使用する人数が少ないが、これは初級から中級の学習者が多い(韓国語母語話者の男性は7人中6人が、女性は5人中3人が初級から中級の学習者である)ためと考えられる。また、4.6で示すように、滞在期間との関わりが深いとも考えられる。以上のことから、母語と使用者数に大きな関わりはないと考えられる。ただし、以下に述べるように、使用形式には関わる可能性がある。

使用形式を見ると、男性はほとんどの学習者が「僕」という自称詞を使うことが分かる。女性は欧米圏の学習者に「名前」という自称詞が見られた。この「名前」という項目に関しては今後、アンケート調査に「名前」という言い方を使うかどうかという質問項目も含めて調査を行う必要がある。また、アンケート調査の1例のみではあるが韓国語母語話者の女性でダイクシスが自

称詞になっている点も注目すべきである。これは母語との関連もある可能性がある。この自称詞は日本語学習者にとって、「ぼく」「あたし」などの他の自称詞と比べて使用される状況が多様であるため、特にどのような意図で使用されるかという使用意識の習得が難しいと考えられる。対称詞で、このダイクシスに対応する「そっち」などを使うのかという疑問も生じる。今後は対称詞も含めて調査を行いたいと考えている。

4.3 学習レベルとの関連

学習レベル別に分けた結果は以下の表のようであった。

表5 学習レベルと「わたし」以外の自称詞の使用

学習レベル	人数	「わたし」以外の 使用者数	「わたし」以外の使用形式お よび使用者数
初級(男性)	5	1	僕1、俺1
初級(女性)	2	0	0
中級(男性)	6	6	僕6、俺3、自分1
中級(女性)	3	1	あたし1、名前1
上級(男性)	3	2	僕2、俺1、わたくし1
上級(女性)	6	3	うち3、こっち1、あたし1

表5から、初級では「わたし」以外の使用者数が少ないことが分かる。初級の女性で「わたし」以外の自称詞を使用する人数が0となっているが、中級や上級では、「わたし」以外の自称詞の使用が見られることから、学習レベルとの関連があることが分かる。また、使用する形式をみても、初級では「僕」、「俺」しかないのに対し、中級以上ではバリエーションが豊富であることが分かる。中級と上級の間には今回の調査からは特に差は見られなかった。このレベルでは基本的な会話はでき、さまざまな場面で日本語を使用して会話することも増えると考えられるため、「わたし」以外の使用形式も出てくると考えられる。

4.4 アニメ、マンガとの関連

アニメやマンガから日本語を学習する学習者が多いため、以下にアニメ、マンガとの関連についてまとめた表を示す。

表6 アニメ、マンガと「わたし」以外の自称詞の使用

アニメ、マンガを見るかどうか	人数	「わたし」以外の使用者数	「わたし」以外の使用形式および使用者数
アニメもマンガも見ない	2	2	僕1、俺1、あたし1、名前1
アニメを見る	6	1	僕1、俺1、わたくし1
マンガを見る	1	1	僕1、俺1
アニメもマンガも見	16	6	僕6、俺2、うち2、自分1、こっち1、あたし1

アニメもマンガも見る学習者は16人と多いが、「わたし」以外の形式の使用人数は半分に満たない。一方、アニメも見ないし、マンガも読まないという学習者にも人数は2人であるが、自称詞のバラエティが複数見られた。この結果から、アニメを見るから、マンガを読むからといって、それが直接「わたし」以外の自称詞の使用が増えることにつながるとは言えないようだ。ただ、ドラマや映画などで調査をすると結果が変わる可能性はある。

アニメだけ見る学習者にバラエティが少ないのはレベルと関連している可能性が考えられる。つまり、漢字もある文を読むというのは、ある程度のレベルでなければ難しいということである。

4.5 「わたし」以外の自称詞を使うようになったきっかけ

ここでは、「わたし」以外の自称詞を使用するようになった理由をアンケートおよびインタビュー結果から「本で読んだから」「授業で習ったから」「友達などとの関わり(生活の中で身につけた)」という3つに分ける。人数はそれぞれ、2人、3人、7人である。

まず、本で読んで知ったという2人の学習者であるが、K3は「僕」「俺」と、

T1は「僕」「自分」と回答している。K3は友人と話す時の形式としてこの自称詞を本で読んで知って以来使うようになったようである。T1は「僕」は使うが、使いたいわけではないと答えている。これは周りにあわせて使っていると考えられる。「自分」についてはいつ使うのか不明である。

次に授業で習ったと答えた3人はいずれも「僕」を使っている。授業の時に聞いて気に入ったり、友達同士の会話ではこの自称詞の方が「わたし」より親しみがあり、よいと考えたと回答している。教科書および授業で知ったという学習者には、「俺」は見られなかった。

最後に、日本での生活において身につけたと答えた学習者について見ていく。C1は「僕」「俺」「わたくし」を挙げている。C2は独学で、「俺」「僕」を挙げている。E1も「僕」「俺」を挙げ、インフォーマルな場面で自然に習得したと答えている。A3は「あたし」と「名前」を挙げている。日本に留学してホストファミリーと生活しているうちに使うようになったようである。K8とK9は日本に住んでいて、日本の大学に在籍している学習者で、他とはレベルも異なり、日本にも慣れている学習者である。K8は滞在期間が2年で「こっち」と「うち」を挙げている。日本の友人と話しているうちに使うようになったり、テレビを見て知って、使いはじめたようである。K9は滞在期間が4年で「うち」を挙げ、やはり、仲間と話すうちに知ったとのことである。また、この学習者にはインタビューにおいて「あたし」の使用もあった。K2は「俺」「僕」と回答し、日本の友人に勧められ使いはじめたと言う。このように、生活の中で知ったと言っても、自分で日本人が話しているのを聞いて知って使うようになった例や、友人に勧められて使用するようになった例などさまざまである。全体的に生活の中で学んだ学習者はきっかけがはっきりしない(自然に使用するようになった)と言える。

以上のことから分かるのは、日本で学んだか外国で学んだかということと使用する形式に関連があるということである。特に、日本での生活において使うようになったと答えた学習者には多くのバリエーションが見られる。

4.6 日本での滞在期間との関連

最後に日本での滞在期間との関連を示す。調査した時点で、滞在期間が1ヶ月未満の学習者、1ヶ月以上から1年未満の学習者、それ以上の学習者という分け方をする。また、過去にも留学したことがあると答えた学習者はそれも滞在期間に含む。これは、どれぐらいの期間滞在するかということや、周りの人とのコミュニケーションに差があると考えたからである。例えば、どれぐらいの人数の日本人とコミュニケーションをとるかということや、どんな場面でどんな話題の話をするかなどである。次の表7はその結果である。

表7 日本での滞在歴と「わたし」以外の自称詞の使用

滞在歴	人数	「わたし」以外の 使用者数	「わたし」以外の使用形式
1ヶ月未満	9	1	僕、俺
1ヶ月から1年	13	9	自分、俺、僕、あたし、名前
1年以上	3	3	俺、僕、あたし、わたくし、 うち、こっち

この結果から、1ヶ月以上滞在している学習者にバリエーションが多数見られることが分かる。1ヶ月未満の学習者の中にもアンケート調査のみを行った学習者で、学習の際に使用した教科書から上級であると判断した学習者はいるが、会話では「わたし」しか使わないようである。これは使う環境の差であると考えられる。つまり、「わたし」以外の形式を知っている可能性はあるが、使用という点では、日本の友達と日本語で親しみをこめて話す場面がないため、「わたし」しか使用しないということである。

以上のことから、日本に長く滞在し、さまざまな場面で日本人とコミュニケーションをとる機会の多い学習者には、多数のバリエーションの使用があることが分かる。それは、4.5で指摘した、生活の中で知って使うようになったという学習者にバリエーションが多いこともとも関わることである。使用という点から見た場合、実際のコミュニケーションが大きく関わっていることが分かる。

5. 教科書における自称詞の扱い

教科書を対象にした先行研究である谷部(2010:329)によれば、若年層の学習者にとって「親しさ」をどう表現するかは関心が高く、場面などの提示で、初級段階で普通体発話のバリエーションを提示できるという。また、恩塚(2011:65)で初級でも「普通体を用いた会話には、文字情報の中で発話者の性別を明らかにするために、当然、男性キャラ終助詞と女性キャラ終助詞が必要となってくる。」との指摘がある。これらは自称詞にも当てはまることだと言える。

ここではアンケート調査で25人中10人が使用したと答えた『みんなの日本語』を中心に教科書について見ていく。調査範囲は『みんなの日本語』の初級Ⅰと初級Ⅱの本冊と聞き取りの本文といえる解答のスキプトの部分である。解答のスキプトを調査範囲に含むのは会話を聞く練習になっており、場面設定があると考えられるからである。なお、教科書で「うち」という形式が出てくるが、これらは全て「家」という意味での使用である。

「わたし」以外の自称詞で最初に提示される形式は「僕」で、普通体を扱う課である20課(p.170)に出てくる。ここでは、文型を示す際に使用されているので、「僕」を使用する人物がどのような人物として設定されているかは明らかではない。初級Ⅰの本冊で使用されているものは他に2例ある。p.211では「僕」が1つの文章の中で複数回使用されており、「僕のおばあちゃん^{さい}は72歳で、^{げんき}元気です。」などの文の内容から、男の子であることが分かる。また、p.219では教科書にある年齢の記述から男の子であると言える。しかし、解答のスキプトでは、p.45、p.46、p.52のうち2例は記述からは男の人であるということしか分からない(p.45とp.46はいずれも文のはじめに「男」という表記がある)。以上のことより、初級Ⅰでは、「僕」を使用する人物は子どもも含む男の人と設定されていると言える。初級Ⅱで扱われている「僕」は学生や会社員が使用している。それゆえ、「僕」は、男性が使用する形式で、年齢には関係がないという扱いだと考えられる。

初級Ⅱでは他に「わたくし」という新出の形式が

^{わたくし}私 はアメリカから参^{まい}りました。(p. 214)

などと示されている。この課は敬語を扱う課であるので、丁寧な自称詞として提示されている。ここでは、他の使用例をみても、敬語と共に起しており、性別は不明である。例文として、p. 206のように「^{わたくし}私 はミラーと申します。」と人物名が挙げられているものもあるがこれも性別は不明である。

初級の教科書全体を通してみると、「わたし」以外の自称詞のバリエーションとして、「僕」、「わたくし」が提示されていて、「僕」に関しては男性が使用する形式とされていることが明らかになった。このことから、4. 5 で見たように、教科書で知って以来使用するようになったという学習者に「俺」などの形式がでてこなかったのは当然と言えるが、学習者が使用した教科書により差があることは考えられる。また、4. 5 で取り上げた、授業で知って使いはじめたという3人が全て『みんなの日本語』を使用したわけではない。

6. まとめ

本稿では、以下のことが明らかになった。

- (1) 男性は女性に比べて「わたし」以外の自称詞を使用することが多い。
- (2) 男性がよく使う「俺」、「僕」などの自称詞以外に主に女性にダイクシスを自称詞として使用する例や名前と言う例が見られる。
- (3) アニメやマンガを見るかどうかと「わたし」以外の自称詞の使用は関わりが深いとは言えない。
- (4) 日本に滞在することや日本人とコミュニケーションをとることと、「わたし」以外の自称詞の使用は深く関わっている。

また、教科書で提示されている「わたし」以外の自称詞は「僕」と「わたくし」のみであったが、初級で「俺」という学習者がいることから、日本で日本語を学習する場合には特に、場面設定を十分考慮し教科書で「俺」という形式を提示することがあってもよいのではないと思われる。提示の際には渡部(2006:95)も「日本で日本語や日本文化に触れながら日本語を学んでい

る学習者も、特に初級の段階においては、教師や教材を通して日本語や日本社会を見つめているだろう。」と述べているように、日本語の自称詞、対称詞の使用実態を学習者に正しく伝えられるように使用される場面状況の設定に関して注意が必要である。

初級の女性の「わたし」以外の使用形式は今回の調査では見られなかったが、教科書で「僕」に対応する女性が使用する形式が見られなかったためとも言える。その点を考えると女性が主に使用する形式(「あたし」など)を提示することがあってもよいのではないかと考えられる。とはいえ、本調査では初級の女性の人数が少なかったことや、インタビュー調査が行えなかったなどの問題があったので、この問題の検討にはまだ調査を行う必要がある。

今後の課題としては、今回は調査人数が少なかったので、もっと多人数の調査を行う必要があること、今回得た結果((1)～(4))を個別のテーマとして設定し、具体的に調査する必要があることが挙げられる。そのような調査を行い、はじめにも述べた自称詞、対称詞のどのような形式をいつごろどのように扱っていけばよいのかという問題を解決していくことにより、学習者が自分の意図(親しさなど)を正しく伝えられるようになる。そして、学習者と日本人とのコミュニケーションが円滑に進むようになるのではないかと考えられる。

注

- (1) 表のCは中国出身のインフォーマントであることを示し、Kは韓国、Aはアメリカ、Eはイギリス、Fはフランス、Tは台湾をそれぞれ示す。
- (2) 1年以上という場合には4年などという場合もあるが、ここでは慣れているかどうかの問題になるため、1年以上にまとめることにする。

調査対象教科書

スリーエーネットワーク編(2012)『みんなの日本語 初級Ⅰ第2版』スリーエーネットワーク

スリーエーネットワーク編(2012)『みんなの日本語 初級Ⅱ第2版』スリーエーネットワーク

資料1

アンケート用紙

アンケートにご協力お願いします。以下の項目に回答してください。

- 1 名前
()
- 2 出身国 ()
- 3 母語 ()
- 4 日本語学習歴 出身国で()年()カ月 日本で()年()カ月
学習する時に使った教科書は何ですか。また、どこまで学習しましたか。

例：『みんなの日本語初級 I』 13課まで / 『みんなの日本語初級 I』 半分ぐらいまで

出身国で

()

日本で

()

- 5 いつ日本に来ましたか。 ()
- 6 日本のマンガは読みますか。 【はい・いいえ】
- 7 日本のアニメは見ますか。 【はい・いいえ】
- 8 自分を言うときに「わたし」以外の言い方をしますか。 【はい・いいえ】
- 9 【8で『はい』と答えた人のみ回答】

どのような言い方をしますか。

()

そのような言い方をするようになったのはなぜですか。

()

ご協力ありがとうございました。

参考文献

- 大浜るい子・荒牧ちさ子・曾儀婷(2001)「日本語教科書に見られる自称詞・対称詞の使用について」『教育学研究紀要』47-2 pp. 342-352 中国四国教育学会
- 小川早百合(2006)「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識—日本語教育での活用へ向けて—」日本語ジェンダー学会編・佐々木瑞枝監修『日本語とジェンダー』pp. 39-51 ひつじ書房
- 恩塚千代(2011)「韓国の教科書における役割語の役割—「生きた日本語」を教えるパーチャルリアリティー」金水敏編『役割語研究の展開』pp. 51-70 くろしお出版
- 楠本徹也(2010)「日本語の対話テキストにおける自称詞・対称詞の主題機能—中国人学習者の日本語による初対面会話からの分析」『東京外国語大学論集』81 pp. 155-166 東京外国語大学
- 小林美恵子(1997a)「自称・対称は中性化するか？」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』pp. 113-137 ひつじ書房
- 小林美恵子(1997b)「自称の獲得—高校生へのアンケート調査から—」『ことば』18 pp. 12-26 現代日本語研究会
- 定延利之(2005)『ささやく恋人、りきむレポーター—口の中の文化』岩波書店
- 杉戸清樹(2007)「日本語社会における言語行動のバリエーションと日本語教育」『日本語教育』134 pp. 18-27 日本語教育学会
- 鈴木睦(2007)「言葉の男女差と日本語教育」『日本語教育』134 pp. 48-57 日本語教育学会
- 谷部弘子(2010)「モデルとして捉えられた男女の普通体発話 初級日本語教科書にみるバリエーションの提示と可能性」遠藤織枝・小林美恵子・桜井隆編『世界をつなぐことば ことばとジェンダー／日本語教育／中国女文字』pp. 317-331 三元社
- 渡部孝子(2006)「日本語教材とジェンダー」日本語ジェンダー学会編・佐々木瑞枝監修『日本語とジェンダー』pp. 95-107 ひつじ書房

(たなか ゆうき・甲南大学4年)